

都市の「公共空間」は誰のものか

23 日午後、立命館大学大阪いばらきキャンパスで、表題をテーマにした国際シンポジウムがあった。対面・オンライン併用だったが、発言しなかった所以对面参加にした。久しぶり行ったが、広いキャンパスなので、会場に行くのに迷ってしまった。

まず龍谷大学の 2 人の研究者から 30 分ずつ示唆に富む報告があった。阿部大輔氏は「観光政策再考：ポスト・オーバーツーリズムにおけるいくつかの論点」と題して、海外と京都の事例を中心にビジュアルに報告した。オーバーツーリズムが都市空間にもたらしたものとして、宿泊施設の増加、地価の上昇、界隈の社会・文化環境の破壊をあげ、ポストコロナの観光政策の可能性を提起した。多くの資料のなかでも、京都市における簡易宿所の爆発的な増加と地域分布に注目した。

矢作弘氏による「現代都市とジェントリフィケーション(G)」報告は、G の定義と理論、ニューヨークなどスーパースター都市の変容とパンデミックの影響などを概説する。矢作氏の『都市危機のアメリカ 凋落と再生の現場を歩く』を研究会で報告・討論したことを思い出した。アフター・パンデミックとして、在宅勤務の行方（ハイブリッド型）と都市の復活について問題を投げかけた。大阪の G として新今宮地区の変容と星野リゾート進出が紹介されたが、馴染みの界隈であり興味深かった。



続いて主催者である立命館大学の吉田友彦氏が「高齢者の顕著な減少からみる都市空間の公共性：大阪府を事例として」、森裕之氏が「人口減少・高齢化と大都市の行財政：京都と大阪の事例から」と題して報告した。居住状況などから「多死社会」大阪の実態に迫る実証研究、行財政分析からの京都市と大阪市の比較研究から学ぶことが多かった。写真は質疑のコーナーで、左から矢作、吉田、阿部、森の各氏。

質疑では、私がトップバッターとして感想とコメントを駆け足で述べた。阿部報告に対し、オーバーツーリズムの実態が分かったが、観光とイベント傾斜・依存の都市政策をどう考えるか、大阪の事例から質問した。時間があれば、矢作氏には大阪は G が進行して、地域が分断されているのではないかと、吉田氏には、大阪の「多死社会」と全国一のコロナ禍による感染死との関係を質問したかった。

オンラインでなく、対面でシンポジウムに参加してよかった。大阪や京都など関西の大都市を国際的な視野で調査研究することが、いま求められているのではないかと。立命館大学を中心とした学際的な研究に期待したい。キャンパスから自宅まで意外に近いことを実感しながら、足早に帰路についた。

(2023 年 2 月 25 日)